

第42回の運動会も無事に終えることができました。昨年に続いて今年も無観客での開催としましたが、あらためて振り返ってみると、昨年と今年の無観客による「子どもたちの 子どもたちによる 子どもたちのためのうんどうかい」へのとりくみの良い点がたくさん見えてきたように思います。

昨年、コロナ禍において運動会の「開催自体どうするか」を考えたときに、「そもそも運動会は誰のためにやるの?」「何のためにやるの?」ということから考えました。子どもたちの成長をおうちの方々に見てもらう場ではあるけれど、本来は、子どもたち自身のための運動会のはずだよね。運動会のためにいろんなことにチャレンジして力をつけていくことも大事だけれど、「何にチャレンジするか(「チャレンジしない」という選択も含め)」は、大人が決めるんじゃないくて、子どもたち自身にもっと任せていいんじゃない? なによりも「体を動かすことが楽しい」という経験を今のうちにいっぱいしてもらおうことが、一番の目標なんじゃない? ……そんなことを職員間で話し合い、共通理解してきました。その結果、「子どものための運動会を開催しよう!」「取り組み自体を、もっともっと子どもたちと一緒につくりあげるものにしていこう!」と運動会の開催を決めました。ただし、感染対策としておうちの方々には申し訳ないけれども「無観客での開催」とし、その代わり、動画や写真で子どもたちの姿をたくさん見てもらおうということにしたのでした。

緊張感の軽減 ちいさな子どもたちにとって、大勢の観客がいると、それだけで緊張して固まってしまう。動画配信をご覧になられた方はお気づきになられたかと思いますが、観客がいなくてもいつもと違う雰囲気、保育者や周りの子たちから注目を浴びたり、カメラを向けられるだけでも敏感に感じて、ちょっぴり緊張してしまいます。そうした緊張感をできるかぎり抑えて、それなりに普段の姿に近い姿でご覧頂けたのは「無観客ならでは」だったと思います。

「かけっこ 誰と走る?」「競争に勝つこと」を目的にさせるのではなく、「走ることの楽しさ」を十分味わってほしい。それを実現するためだったら、誰と走るか子ども自身が決めてもいいんじゃない?ということになりました。1人で全力で走るもよし、仲良しのともだちやきょうだいで手をつないで走るもよし、大人と走るもよし、友達と競うもよし、それぞれの楽しみ方で、とにかく「走ることを楽しむ!」動画や写真の表情から、どの子も本当に嬉しそうに、楽しそうに走っている様子がご覧頂けたかと思います。

種目は子どもたちの意見を尊重して決める 私たち大人は、これまでの経験を通して、すでに「運動会」というもののイメージができてしまっています。目標を決めてそれに向かって頑張るとか、個人、あるいは団体で競うとか、それはそれで楽しめる子もいますが、みんながみんなというわけではありません。ですから、運動会の楽しみ方はもっといろいろあっていいんじゃないか、運動が得意な子もそうでない子も、それぞれが自分の楽しみ方を見つけていくことのほうが大事なのではと思うようになりました。運動会を行う大きな目標を、「体を動かす楽しさを十分に味わう」とし、「将来、大人になってからも体を動かすことを楽しめるように」と考えました。そうすると、わざわざ子どもたちに競争させなくても、またいろいろ大人がルールを持ち込む必要もないんじゃないかと思うようになりました。もちろん、子どもたちの中から生まれてくる競争心やチャレンジしたいという気持ちは大事にして、競った方が楽しいと思えるものは競ったりしますが、何でもかんでも競わせる必要はないと思います。そうしたなかで、あえて、いわゆる「運動会」の経験の少ない子どもたちに、「運動会で何やりたい?」と尋ねることによって、大人の既成概念にとらわれない、子どもたちの柔軟な頭で「どうやったら体を動かすことを楽しめるか?」というアイデアを引き出すことができたように思います。それで、かくれんぼやけいどろ(鬼ごっこ)、ぶらんこ、タワーからのジャンプなどなど、一般的なよその運動会では種目にならないようなものが、わが園では堂々と運動会の種目になっていたのです。

参加の仕方もそれぞれ 体操やダンスをするのに、きちんと並んでみんなで一緒にする必要はあるのでしょうか? ばらばらで踊っていると確かに「見栄え」はあまりよくないかもしれませんが、みんなと一緒にだと恥ずかしかったりする子も、テラスや少し離れた木陰、大型滑り台の上など、それぞれが自分の落ち着く場所で音楽に合わせて体を動かす姿が見られました。みんなの前で踊っていたのは自ら名乗り出た子どもたちです。それぞれ自分の落ち着く場所で、見よう見まねで、同じ動きをしようとする子もいれば、独創的な動きで踊る子もいました。これらもきっと子どもたちの内側からあふれる多種多様な表現なんだろうと感じました。「見栄え」を大事と考えるのか、「リズムにのって体を動かす楽しさを感じることを大事にするのか」の視点の違いだと思います。跳び箱も同様です。以前なら、正しいとされる体の動きをいかに指導するかを大事にしていたのですが、担任の思いもあって、自分の跳びやすい方法で跳び越えていいことにしました。目的を達成するための「手段(跳び方)」を大切にすること、(跳び方)はどうあれ、目的を遂げる(跳び越えること)を大切にすること、後者を大切にすることが、子どもたちの意欲や積極性、楽しみが、より膨らむようにも感じています。

また、年齢の枠を超えて、小さい子が飛び入りで大きい子たちの種目に交じって参加したり、それを温かく迎え入れている大きい子たちの姿も素敵だなと思いました。

自分たちのやりたいことが実現するという経験 きらきら(3・4・5歳児クラス)では、ミニ運動会を重ねるなかで、毎回、何をしたいか子どもたちと話し合っ種目を考えてきました。大人が決めたものを「やらされる」のではなく、「自分たちのやりたいことが実現できる」という経験、そのためには、どうやったらできるのか、やってみてうまくいかなかったことなどがあると、またみんなで知恵を絞って、話し合っ、次に生かすなどなど。自分たちで考えること、みんなの同意を得ること、自分たちで納得のいくルールをつくっていくなども経験することができます。そして、こうしたプロセスを経験することも、子どもたちの運動会にむけての意欲的、積極的な姿勢につながっていったのだと思います。

こうした取り組みによって、大人がイメージ(計画)した運動会に子どもたちを合わせていくのではなく、子どもたち自身が考えながら、一緒に創りながら、それぞれの楽しみ方で参加する運動会に、「子どもたちの 子どもたちによる 子どもたちのためのうんどうかい」にしたいという目標にまた一歩近づいたように思います。こうした取り組みの良いところは、新型コロナウイルスの感染が終息した後も継続していきたいと考えています。

ぜひ、ご覧になったご意見、ご感想等お寄せください。